

210

演題名：動脈硬化における悪玉コレステロールの有用性

演者：黒田 清一

共同演者：田邊 敏子 小林 江里 竹内 秀史

所属：日本医学株式会社

【はじめに】第3期特定健診がこの4月からスタートし、脂質異常の判定項目の中に従来からのLDL-Cに加えて、nonHDL-Cが採用されるようになった。

今回、我々はLDL-CおよびnonHDL-Cの異常高値を抽出した中で、両者の乖離したデータについて解析を行い、かつ、動脈硬化関連項目の追加測定をすることで、動脈硬化に対するLDL-CとnonHDL-Cの有用性の検討を行った。

【対象】2017年9月～2018年5月に受診された高血圧および高血糖、高脂質に対する服薬歴のない男性約26000名を対象とした。

【方法】まず、nonHDL-C、LDL-Cについて、2項目ともに正常または異常高値、どちらかが異常高値の4グループに分類した。各グループについて、生活習慣病に関わる因子として、脂質（中性脂肪など）および関連項目（血糖および尿酸、肝機能）、腹囲、BMI、血圧の異常率を調査した。さらに、脂質関連物質であるレムナント様リポ蛋白コレステロール（以下RLP-C）およびリポ蛋白

(a)(以下Lp(a))を追加検査した。

【結果】

男性(26336名)対象 〈薬剤未服用〉		LDL (139mg/dl)	
		正常	異常
nonHDL (169mg/dl)	正常	70.7% A	6.4% C
	異常	3.2% B	19.7% D

B群では、中性脂肪が96.7%の割合で異常高値を示し、生活習慣病に関わる因子でも他の群に比べて、高い割合での異常率が認められた。追加検査でも、RLP-Cが同様に高い異常率が認められた。C群においては、際立った異常率は認められなかったものの、Lp(a)は最も高い異常率であった。

【まとめ】C群は脂質検査以外の項目では、A群と顕著な差が認められなかった。B群については、中性脂肪やRLP-Cの異常率が高く、生活習慣病に関わる因子でも高かったことから、nonHDL-Cによる脂質異常判定の方が従来のLDL-Cによる判定よりもより有用性が高いのではないかと考えられた。 【連絡先 072-426-3616】